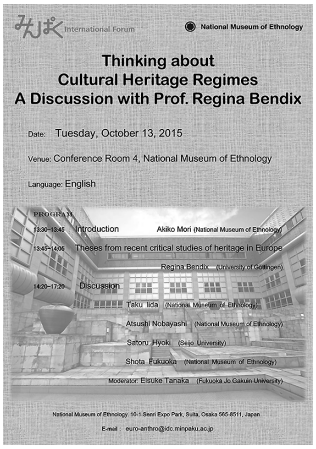
# 研究成果の公開――最近開催されたシンポジウム等から

## 機関研究「文化遺産の人類学――グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

### 国際フォーラム
### 「文化遺産レジームを考える――レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」

日時：2015年10月13日（火）
場所：国立民族学博物館　セミナー室
主催：国立民族学博物館
共催：日本民俗学会第67回年会実行委員会、科研費基盤研究(A)「東アジア＜日常学としての民俗学＞の構築に向けて――日中韓と独との研究協業網の形成」
企画：森明子・飯田卓（国立民族学博物館）




文化遺産は、近年のヨーロッパの文化人類学・民族学研究の主要テーマのひとつである。このフォーラムは、文化遺産をめぐる欧米の最新の議論と、民博の機関研究「文化遺産の人類学」の対話をはかることを目的として、ヨーロッパの文化人類学・民族学を研究する森が発案し、民博の機関研究代表者である飯田の賛同を得て実現した。

1990年代以降、文化遺産は全世界的なトレンドともいえる活況を見せている。一方で、文化遺産認定をめぐって、行政や市場を巻き込んで展開する状況は、研究者にとまどいを与えることも少なくない。その少なくとも一部は、ほんらいローカルな文化であると理解されてきたものに、グローバルな認定をしようとする局面で起こっている。「文化遺産レジーム」とは、この局面に注目した「文化をめぐる文化」についての議論で、ヨーロッパにおける近年の議論である。

フォーラムでは、ドイツからレギーナ・ベンディクス（ゲッティンゲン大学）を迎えて、日本の遺産をめぐるアクチュアルな実態をとりあげながら、レジームという観点の蓋然性や有効性などを討議した。ベンディクスは、2013年に国際法の研究者とともに400頁余にわたる『文化遺産レジームと国家』（ゲッティンゲン大学出版局）を刊行している。

今回のフォーラムにより、文化遺産のフィールド調査に基づいた考察を、理論的に発展させるために、より精緻なものに鍛えることができた。

## みんぱく公開講演会
### 「育児の人類学、介護の民俗学――フィールドワークによる再発見」

日時：2015年11月13日（金）
場所：日経ホール
主催：国立民族学博物館、日本経済新聞社

本講演では、ダウン症のある子どもを療育する人類学者と介護施設で働きながらお年寄りの話を聞き書きする民俗学者を講演者とし、障がいのある子どもの家族や認知症、介護の現場などにつきまとう否定的なイメージを問い直し、多様な人びとが暮らしやすい社会を実現する新たな可能性について考えた。

まず信田敏宏（民博）が、「心に寄り添う子育てとは？――遊びと学びのすごろくワールド」と題して講演した。ダウン症のある娘の心が清らかに成長していくプロセスを語り、人類学者として、父親として、これから社会はどうあるべきか、心豊かで幸せな人生を送るために必要なこととは何かを問いかけた。

つぎに、六車由美（デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員）が、「聞き書きで介護の世界が変わっていく――介護民俗学の実践から」と題し講演を行った。民俗学者でもある六車は、民俗学の「聞き書き」の手法を介護現場で試み、そうすることで、介護職員と利用者の固定された関係性が逆転することを紹介し、介護民俗学の実践を通して、人が最期まで人として生きられる、希望のある介護のあり方を語った。

活発な討論が行われ、育児と介護の現場におけるフィールドワークから、少子高齢化をむかえた日本社会のゆくえを探ることができた。

## シンポジウム
### 「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開――展示・教育から観光・まちづくりまで」

日時：2015年11月28日（土）～29日（日）
場所：国立民族学博物館　セミナー室
主催：国立民族学博物館
後援：全日本博物館学会、日本博物館協会、日本ミュージアム・マネージメント学会
企画：広瀬浩二郎（国立民族学博物館）

本シンポジウムは、共同研究「触文化に関する人類学的研究」の成果を公開することを目的として実施した。2日間に渡って研究者、学芸員、アーティストなどが集い、「深める」と「伸ばす」をキーワードとして、ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の可能性について、多角的に考えた。

1日目は、各地の美術館・博物館で試みられている展示、教育プログラムの事例を報告した。単なる視覚障害者支援にとどまらず、ミュージアムそのもの、ひいては社会を改変していく触文化の実践的研究を推進するのが、1日目の発表者を貫く基本スタンスといえる。これまで、触察による鑑賞は主に三次元の立体物を対象としてきたが、本シンポジウムでは視覚障害者が二次元の絵画作品を触学・触楽するさまざまな手法を提示し、ユニバーサル・ミュージアム論の深化を確認・検証した。

2日目は、博物館の枠にこだわらず、自由な発想で企画される触発型ワークショップの諸相、および五感を駆使して「誰もが楽しめる」観光・まちづくりをめざす先進的な取り組みを紹介した。触文化・“手学問”概念を他分野に応用して、その普遍性を明らかにするのが2日目の狙いだった。

本シンポジウムを通じて、触文化・“手学問”理論の各方面への伸展は、「感覚の多様性」が尊重されるミュージアムの未来像、障害／健常という二分法を乗り越える新たな人間観の提案につながることを確信した。その手応えを参加者が共有できたのは有意義だった。